

対馬防災考

～被災地から学ぶこと～



日本のあり方を根底から覆した「3.11 東日本大震災」。

2年以上が経過した今も、被災地は復旧・復興に向けて険しい道のりを1歩ずつ前に進んでいます。

かの地には、ここ対馬からも多くの人が出向き、それぞれの立場で「東北のために」汗を流しています。

今回の「対馬で生きる 対馬をつなぐ」は、現場に出向き、現状を目の当たりにした人だからこそ語れる「被災地の今」と「今、私たちができる対馬の防災」についてお話しいただきました。

いつ、どのような経緯で被災地へ行かれたんですか？

阿比留

私たちが支援に行かせてもらったのは昨年の6月。きっかけは、長崎県の子育て支援事業の一環として、NPPファシリテーター（※）の資格をもつ私たちに声がかかったことです。行く前は正直悩みました。余震もあるし、家族もいるし…。でも「私にできることなら」と勇気を出しました。

岩手県陸前高田市・宮城県栗原市・宮城県石巻市の仮設住宅で被災された親子のサポートを行い、プレハブの支援センターで沢山の出会いがありました。また、自らも被災しながら頑張ってたっしやる先生やスタッフの悩みも共有する機会をいただきました。

※NPPファシリテーター…ノバデイズバーフェクトプログラムファシリテーターカナダ政府によって開発され、日本各地でも実績をあげている親支援プログラム。参加者がそれぞれ抱えている悩みや関心事を出し合い、みんなで話し合いながら自分に合った子育て方法を学ぶもの。ファシリテーターは、参加者の体験や認め合いを引き出す役割を担う。

北原

私の場合、陸上自衛官である主人が先に被災地支援に行ってきたんです。この話が来たとき、主人が「機会があるのならばぜひ行ってきなさい。家のことは全然心配いらないから」と背中を押してくれました。

現地でタクシーに乗った時、運転手さんが「この事実を風化させてはいけません。いろんな人に語り継いでいかなければいけない」と言われたことが心に残っています。私たちと同じ保育園の先生方もたくさん話しました。震災があった時はちょうどお昼寝の時間だったそうで、先生たちは子どもたちを抱えて近くの山に避難したそうです。

原田

私は、昨年の11・12月の2ヶ月間、宮城県石巻市で漁港施設の災害復旧ということで、現地の職員さんとともに防波堤や岸壁の設計・入札などに携わりました。

対馬市からはこれまで事務職員や消防士・保健師など30名を超える職員が派遣されてきましたが、最近では私たちのような漁港建設職員の応援が求められています。

現地に行つてまず最初に感じたのは、何も残っていないかったということ。30数世帯で90人程が住んでいた地域では、津波にのまれ、わずか3戸しか残つておらず、あとはさら地。担当した漁港が、元々どんな形だったのかもわからない状態でした。仲間の漁師さんが亡くなったり、生き残った知り合いもほとんどが転居したというある男性から「もう人がいなくなつたから、岸壁はこれまでの半分の長さでいいよ」と言われた言葉が深く心に残っています。

「何かのお手伝いができれば…」という気持ちで現地に入りましたが、「予算が計上され、全国から人が集まってきただけ“では復興は進まない”というのを強く感じました。

長瀬

私は、消防団の一員として一昨年の9月に石巻市へ行きました。それまで数年に1回行っていた消防団の慰安旅行を取りやめて、その積立金で被災地支援のボランティアに行くことになったんです。

消防団員は業種も様々で、中には重機が扱える者もいましたので、ボランティアを受け入れるNPOを通じて、住民のみなさんが「何をしてほしいか」とのニーズを伺い、2日間ではありましたが、側溝にたまったヘドロやがれきの除去を行いました。津波が押し寄せた小学校の教室にはランドセルが

散乱していました。テレビの映像で見ていた光景を目の当たりにして強い衝撃を受けました。あの時お手伝いした場所がどうなっているか、今も気になっています。

被災地での体験後、何か変化がありましたか？

阿比留

私が勤務している保育園では、初めて津波を想定した大掛かりな避難訓練を行いました。保育園の上にあるお寺を避難場所をお願いし「もし津波がきたら、一人は抱っこ、一人はおんぶしよう！じゃあ、おんぶひもが何個あるね」など、園内の先生たちと真剣に話しました。避難時間も測り、消防署の方々にもご指導いただきました。坂道を避難するときは

阿比留 尚美さん（厳原南保育園 保育士）



北原 和子さん（厳原南保育園 保育士）

絶対にベビーカーを使っちゃいけないんです。

これまで私たちがやってきた避難訓練は、決まった時間に、決まったコメント、決まった場所が当たり前になっていましたが、いろんなパターンで避難訓練を行うようになりました。訓練を通じて地域の方々ともつながることができています。

原田

被災地から帰ってきて、職場はもちろんですが、私の地元豊玉町・乙宮小学校で現地での体験を話す機会をいただきました。手作りの資料で写真を見せながら、被災地の状況を話しました。子どもたちに「同じような津波がきたらこの学校はどうなりますか?」って聞かれたので「この学校の屋上まで津波に飲み込まれるよ」と答えたら「じゃどうすれば?」と。「学校の裏の、あの山に逃げるのが一番」と話しました。

地区の人たちの会話の中にも「津波がきたら、非難するのはあそこ山がいいのお」などという話になり、大震災の教訓が少なからず活かされているのを感じます。

北原

私も息子が通っている久田小学校の5・6年生にお話しする機会をいただきました。被災地の現状を伝えると同時に、「普通の生活・当たり前と思っていることが実はすごく幸せなことなんだ」って伝えました。

子どもたちの感想に「避難訓練がいかに大事かがよくわかりました」とか、「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒にいられることが幸せだと気づきました」などと書かれていて、自分の生活を見つめなおす機会にでもらえたことが嬉しかったです。

長瀬 俊一さん（対馬市消防団厳原第21分団火先班長）



私の息子も野球をしているんですが、被災地の子どもたちは、練習しようにもグローブがない、練習できる場所がないんです。「当たり前」のことを「有難い」と思う生き方をしていきたい」と強く思うようになりました。

長瀬

当時デジカメで撮影した写真を、いつか何らかの形で活用したいと思っています。子どもたちに過剰に不安を植え付ける必要はありませんが、絶対に風化させてはいけないと思いますね。

また被災地から帰ってきて「何かあった時はここに集まろう」といった組織作りをしておかねばならないと感じましたね。それも、平和な時につながっていないければならない。つながって、いろんな話をしていくうちに「もし自分たちに襲ってきたら…」という不安な部分が見えてくると思うので、少しずつ形にしていきたいと考えているところです。

原田

実は石巻滞在中の12月7日に、震度5強の地震・90cmの津波を体験しました。驚いたのは5分もしないうちに災害対策本部ができて、すぐに市職員全員が待機に入ったことです。

石巻市の職員さんは津波警報が解除された翌朝も5〜6時に出勤して被災状況の調査をしていました。震災を体験した人たちの対応はとも迅速的確。私たち対馬市の職員もそこまでならなければいけないと感じました。

今、対馬の多くの人が「対馬には津波は来ないだろう」と思っているかもしれませんが、その「だろう」を消したいですね。

今、私たちができること、しなければならぬことは?

長瀬

私が住む佐須周辺も海に面した地区などは、あのような災害に襲われると全滅が予想されます。消防団としてどうやって避難誘導すればいいのかと考えます。また消防団だけでなく、自分が所属している佐須響心会や商工会という異業種の集まりの強みをいろんな面で生かせたらと思っています。

介護保険関連の仕事をしている関係で、独り暮らしのお宅に行く機会もよくあるんですが、雑談でもなんでも普段から声掛けするようにしています。この家にはこんな人が住んでいるとかいう情報を心に留めておくだけで、何かの時にゼロから始めるよりはスムーズに行くはずですから。

仕事でも何でも、地域とのつながりが大切。避難訓練も大規模なものも大切ですが、近所レベルでできるものも大事だと思います。

阿比留

私たちは現地に行き、心の傷を背負っている人たちに直接触れました。これから先、行くだけが支援ではないと思うので、ここ対馬で子どもたちや自分の周囲の方々に少しでもその思いをつなげていけた

らうと思います。

北原

被災地に行つて以来、対馬の道路を走つていても「津波がきたらここは危ない」とか考えるようになりまし、被災地で見聞きした風景や言葉が日常の生活でいつも心の中にあります。これからも自分ができることを常に考え伝えていきたいと思つていきます。

原田

私たち、被災地に支援に行つた人は伝える義務があるし、風化させないことも大事ですが、背伸びする必要はないと思つています。まずは、身近なところから。

私たち行政の職員は「逃げる場所をきめていますか？」つて聞くことから始まると思つています。学校で「津波がきたらあそこに逃げる」つて子どもたちみんなが言えるようになれば、それだけで対馬市の防災になります。

これからも私たちが伝えていくことによつて、学校や家庭で防災に対する会話がなくなるようなきつかけづくりや、防災意識の植え付け役になれば、と考えています。



原田 武茂さん（対馬市農林水産部基盤整備課課長補佐）

対馬市は、東日本大震災を受けて、地震や津波を想定し避難所等の標高などを追加した新しい「対馬市防災計画」を策定しました。

災害のケースによつて、避難できる場所は異なります。避難所一覧は、最寄りの市役所各部署で閲覧できるほか、対馬市ホームページでご覧になれます。



4-5. 避難場所一覧表

避難所名	避難所種別	避難所所在地	避難所面積	避難所収容人数	避難所備蓄品
対馬市庁舎	庁舎	対馬市庁舎	1,000㎡	1,000人	食料、飲料水、寝具
対馬市立中央公民館	公民館	対馬市立中央公民館	500㎡	500人	食料、飲料水、寝具
対馬市立東公民館	公民館	対馬市立東公民館	300㎡	300人	食料、飲料水、寝具
対馬市立西公民館	公民館	対馬市立西公民館	300㎡	300人	食料、飲料水、寝具
対馬市立南公民館	公民館	対馬市立南公民館	300㎡	300人	食料、飲料水、寝具
対馬市立北公民館	公民館	対馬市立北公民館	300㎡	300人	食料、飲料水、寝具
対馬市立東公民館	公民館	対馬市立東公民館	300㎡	300人	食料、飲料水、寝具
対馬市立西公民館	公民館	対馬市立西公民館	300㎡	300人	食料、飲料水、寝具
対馬市立南公民館	公民館	対馬市立南公民館	300㎡	300人	食料、飲料水、寝具
対馬市立北公民館	公民館	対馬市立北公民館	300㎡	300人	食料、飲料水、寝具



なお、本年8月にはNTTタウンページ（株）様が、各世帯に配布されるタウンページに、対馬市市民便利帳として「避難所一覧」を掲載いただく予定です。ご自身が避難する場所を是非一度ご確認ください。

被災地を目の当たりにし、現場を肌で感じた4名が声をそろえた言葉は、私たちの「あり方」を表しています。

「これからもいろいろなかたちで“被災地のチカラ”になりたい」
「何気ない日常こそが本当のしあわせ」
「何かがあってからでは遅い。何かがある前の“準備”が大切」
「一人では生きていけない。私たちは周囲とつながって生かされている」

「もしも」の場合、どうするのか？

まずは「自分」が、そして「家族」で、「地域」で、「職場」で、考えてみるのは“今”です。